

殿御祈事不奉之間、不存知申之由、明鏡に申披畢、仍三條は永被放刀自、不可被召仕云云、代官刀自は可被追放云云、刀自夫民部少輔重季洞院諸大夫以下兩三人、侍所に召置、庭中申金澤をば被籠舍、可被斬歟之由有沙汰、

〔親長卿記〕文明七年八月七日、及晚自勸修寺大納言許送使云、内侍所之上、就吹損有遷座中門廊、

略勸修寺大納言廣橋大納言等申云、内侍所御辛櫃、内豎可奉昇之處、其仁體云年少云不具、俄事不可叶、刀自兩三人、是又不力叶之間、元長刀自可昇出云云、

云、十六日、及晚勸修寺大納言許送使云、内侍所來廿日可有還御本殿、元長可供奉云云、昇御辛櫃

事於今度者仰六位藏人云云、

〔山科家雜記〕文明九年八月十日、内侍所之人數、

こうとう 上はん下づかさ三人 中はん下づかさ三人 下はん下づかさ三人

一のはかせ 二のはかせ かもんのいち 以上十六人

〔實隆公記〕享祿四年五月廿九日、抑今夜内侍所、綠林女孺悉失物、其外預物皆以執之、鑿巽方築垣、登

内侍所南階、開南道之遣戸亂入云云、入御所之者五六人云云、一向不知云云、不可說、神威皇鑒如無候歟、可悲可悲、後五月一日、頭辨及晚來、盜人事申武家、

〔晴豐公記〕天正十年三月十三日、明後日十五日、内侍所御神字樂有之也、萬里小路頭辨充房奉

行也、諸事役人ふれ共、事届かね可有候間、余中山可申付之由被仰出候由、各召候て申付候、大方相濟也、てう玄ん物御下行也、夕方下御所參、上へ御成候也、御供申也、内侍所かめ勅勘也、その御わび

事申余頼也、彼之義夜中申入候也、十四日、かめ義上臈御局へ申入候、長橋殿持明院、伯余めし、かめ參候ても、鈴被參候事は成間敷候由、五辻長橋被申候、此兩人おさへ被申候、玄さい有之、鈴まる

らせ候事成まじきとの玄さいは、御神樂には、内侍所刀自も、別而神事を致し、下段へおり不申候